

# 軽井沢でのシヤンソンと平和の座談会

——車座で語る平和の継続

一般社団法人 洗楓座  
 一般社団法人 e f c o . j p

代表理事  
**佐藤建吉**

## ▼軽井沢との関わり

軽井沢も10月のこの時期になると閑散となる。軽井沢駅から、しなの鉄道で一駅のところの中軽井沢駅がある。4年前の2013年4月に駅舎と隣接した図書館が改築され、「くっかけテラス」という地域交流施設に生まれ変わった。この名前は、この地がその昔に中山道の「沓掛宿」であったことに由来する。

## 駅舎と図書館をつなぐ

地階部分には、「チャレンジショップ」という創業支援施設が設置された。じつは筆者は、そのチャレンジショップの出版公募に応募したことがある。中軽井沢の借宿という地区に寓居があり、秋以降の閑散期の軽井沢と東京（首都圏）を繋ぐ情報発着オフィスが必要ではないかと考えたからであった。その提案

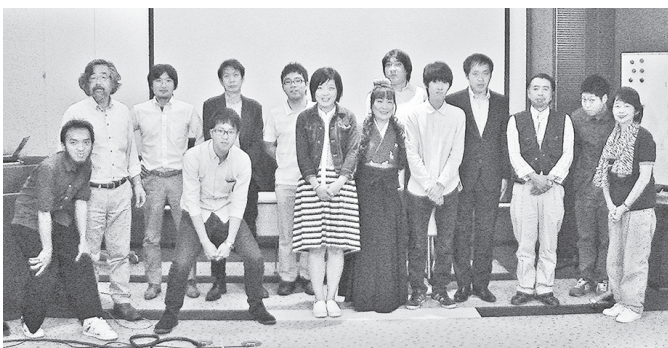


写真1: 「エコフューチャー・セッション」に参加した千葉大学の研究室メンバー

は、ふつうの物販ショップを出店を想定していた軽井沢町の意向とは一致せず見送られたが、選挙委員をされていた町会議員と知遇を得て、くっかけテラスにある「多目的室」を会場として「エコフューチャー・セッション」を、千葉大学の研究室メンバーも動員して何度か行った。■写真1



写真2: 「シヤンソンと平和の座談会」後の女性参加者とムンロ王子の記念写真

## ▼ムンロ王子が登場

昨年、知り合ったムンロ王子が、9月20日に、くっかけテラスの多目的室を予約したというので、そのイベント開催に協力した。ムンロ王子は、東大法学部を卒業したのちIT企業を経営する傍ら趣味で始めたタロット占いで7年間に8000人を占い、その中で人生の機微を学び、またシヤンソンを歌う多才で異才な人物である。

## ▼ムンロ王子の「シヤンソンと平和」

そのイベントは、「軽井沢に恋したムンロ王子のシヤンソンと平和の座談会」と題して行われた。昨今の北朝鮮の連発するミサイル発射、対するアメリカ大統領の反

の本質を見抜いた悪気のない知的なトークは饒舌で人気である。が、「シヤンソンと平和」というテーマにどのように答えるか、見ものであった。

これにムンロ王子は、シヤンソンの日本への導入は戦後の歴史と関係があるとの確に紐解き、かつ4、5曲のシヤンソンを歌い語った。敗戦で英語をよしとしない状況が、非英語のフランス語に目線や耳線が向いたのであるという。

## ▼石飛のトーク&筆者的「平和」

続いて石飛氏は、自身の劇団での経験、ともに活動した蜷川幸雄、蟹江敬三、真山知子の各氏らとの劇団青俳時代の経験を述べ、人びとの「群衆としての意識や行動について語った。とりわけ、演劇人の平和や動乱を演じるための、所作や空気観について述べた。その石飛氏のトークは、さすがに描写的で引き込まれる。いま、石飛氏

ムンロ王子は、1メートル90センチはある長身で、女顔にお化粧し、和服を着流している風体は、かなり怪しい。しかし、さすがに売りにしている東大卒、占い師ならではの

## ▼継続したい市民が語る車座の座談会

号が発行されたときには、すでにそれは終了しているのであるが、大賀ホールでも観客を魅了するはずだ。

「平和」への危惧から発する東京都墨田区にあったバタヤの地区「蟻の町」におけるマリアとして呼ばれた北原怜子（さくら）とゼノ修道士（さくら）の存在と影響の脚本、著作の再構築を行って、平和の再確認の仕事である。

最後に、筆者の司会による参加者全員での座談会を車座になって行った。筆者は、「平和」と「和平」の相違について、二人が共通して挙げた「群衆」の市民性についてコメントした。ほとんどが女性の参加者からは、母性や日常からの平和の危機について、全員が篤く語った。これは軽井沢の民度によるものかとも思ったが、それほど思わなかったが、それはばかりでなく現時の状況での

「好きは唯一瞬に過ぎないが、愛があれば平和も残すことが出来る。」（筆者）

その例として、エディット・ピアフ（1915年〜1963年）を挙げた。中でも『群衆』を取り上げ、歌った。もっとも著名なシヤンソンで祭りの踊りでの市民の出会いを歌っているという。

一時の喜びや平和を暗示させた。また、これも有名なシヤンソンであるが、イタリア人のサルヴァトーレ・アダモ（1943年〜）のフランス語の『雪が降る』を解説した。そしてムンロ自身も歌詞を訳したシヤンソンとして『愛の賛歌』を歌った。

ムンロ王子は、軽井沢の大賀ホールで初めてのソロリサイトを10月1日に行う。このコラムの